

デンマークの疫病文学を読む
-Peter Adolphsen : Rynkeknepesygen を読む-

デンマーク語専攻 佐竹春菜

目次

- 0. はじめに
 - 1. 作家紹介
 - 1.1. 作家略歴
 - 1.2. 執筆スタイル
 - 2. 作品紹介
 - 2.1. あらすじ
 - 2.2. 作品構造
 - 3. 『皴襞性異常性欲症』をどう読むか？
 - 3.1. 性愛と恋愛の文学
 - 3.1.1. 社会での性の解放，そして抑圧
 - 3.1.2. J.バタイユ『眼球譚』へのオマージュ
 - 3.2. 疫病文学として
 - 3.2.1. 疫病文学におけるリアルな描写
 - 3.2.2. 疫病文学で描かれる人々の行動と心理
 - 3.3. ゾンビ・ポップカルチャーとして
 - 4. まとめ
- 使用テキスト
参考文献
インターネット上の資料

要約

2020年から新型コロナウイルスが大流行し世界が混乱に陥る中、カミュの『ペスト』など伝染病をテーマにした疫病文学が再び注目されることが多くなった。デンマークでも、図書館の運営によるホームページ *Litteratursiden* などにおいて疫病文学の特集の記事が組まれたり、作家たちによってコロナ禍への想いが綴られた短編や詩集が出版される動きが生まれたりした。長い歴史の中で人類は、天然痘やペストなど常に病気や死と隣り合わせであり、その恐怖や悲しみは文学のテーマとしても頻繁に扱われてきた。疫病文学の中には、伝染病の恐怖やそれに伴った政治の混乱を描いたものや、病気の蔓延する世界でのロマンスを描いたものなどさまざまな種類がある。本稿では前述したデンマークのコロナ禍文学の記事でも必ず作品名が挙げられていた作品、Peter Adolphsen による『皴癩性異常性欲症』*Rynkeknepesygen* を分析の対象にした。本作品は実際にはコロナのパンデミック前に書かれた作品であるが、コロナ禍の今本書を読み解くにあたって、どのような魅力が再発見され得るか、またこの作品に含まれる多面的な要素についても伝えられるようにまとめた。

第一章では Peter Adolphsen の略歴や執筆スタイルについて述べた。彼のインタビュー記事を参照し、彼がどのような人物に影響され、執筆に際してどのようなことを重要視しているかについてまとめた。非現実的な事象と現実的な説明を組み合わせることによって、作品にリアリティーを持たせるといふ彼の作風は、『皴癩性異常性欲症』においてもよく現れている一面である。

第二章では『皴癩性異常性欲症』のあらすじと作品の構造についてまとめた。『皴癩性異常性欲症』は、宇宙からウイルスがとある女子大学生に漂着するシーンから始まり、デンマーク国内でパンデミックが発生していく過程を描いた物語である。このウイルスは異常なほどの性欲増加を促し、常軌を逸した非理性的な行動を取らせる。また感染するとお腹や顔など皮膚の皴が増え、次第に硬くなり最終的には皮膚が爆発して死んでしまう。ウイルスの特性による常軌を逸したエロティックな描写から、未知なるウイルスと社会の闘いにおける政治や医療への風刺、詳細な科学用語を用いて語られるサイ

エンスフィクション的要素など多くの要素を含みながら、感染者の主人公たちの視点が入れ替わり立ち替わりしながら淡々と物語は進む。この主人公の切り替えが次第に読者との距離を縮め、読者に共感製をもたらすはたらきがあるという点も指摘した。

第三章では『皴褻性異常性欲症』における様々な要素を取り出し分析し、この文学をどのように読むことができるか3つのカテゴリーに分けて論じた。まず性愛・恋愛文学として、そして疫病文学として、最後に本作の持つポップカルチャー的要素についてまとめた。

性愛・恋愛文学としては、理性的な愛とは何か皮肉を投げかける作者の姿勢にもとづいて作品を分析した。感染すると理性がなくなるほど性欲が高まるという病気発症の特性と、本来理性的である(とされる)人間の情愛に伴った性欲が対立して描かれることで、理性的な性とは何か皮肉を投げかける。また、作中で引用されるJ.バタイユの『眼球譚』にも着目して分析した。実際に作品に見られる『眼球譚』やエロティシズムの哲学との共通点についても論じた。

疫病文学としては、疫病が蔓延する社会での人々の心理を、欲望に逃避する心理、信仰にすがる心理、感染症への恐怖で生じるカオスや排他的思考の三つに分類し、本作でこれらの点がどのように描かれているか分析した。

最後にこの作品の持つポップカルチャー的要素について分析をした。『皴褻性異常性欲症』に登場する病気は完全にサイエンスフィクションであり、感染者が加害性を併せ持つというゾンビのような特性がある。従来の疫病文学とは異なる点である。この特性によって、感染症が蔓延しパニックに陥った社会をよりポップに、感染の恐怖を娯楽として消費する大衆的なゾンビ映画のように描いているという見方もできると指摘した。

このように、『皴褻性異常性欲症』には様々な視点から読むことのできる多面的な要素が含まれ、近年注目を浴びた疫病文学としての一面だけでなく、性愛の文学として、またゾンビというポップカルチャー的要素を持つ大衆文学としても楽しめる作品であると結論付けた。